

文化人類学者の誕生：R. ベネディクトの 「ジャーナルの断片 1915 年～ 1934 年」

Birth of an Anthropologist:

R. Benedict's 'Journal Fragments from 1915 to 1934'

菊地 敦子 福井 七子
Atsuko Kikuchi Nanako Fukui

Personal diaries and journals that were used as outlets for the author's emotions or as a record of the author's daily musings must rank high among texts that are difficult to translate. This is mainly because these texts were not written to be read by anyone other than the author, let alone be translated into another language. In translating Ruth Benedict's journals of 1915-1934, the authors of this essay had to consider the situation that Benedict was in at the time, try to put ourselves in her position and trace her thoughts.

In her journal, Benedict wrote about the numbness she felt in daily life, and her desperate need to write, to prove herself, and her hunger for answers. In her journal, we find seeds of what later blossomed in her work as an anthropologist: motives for her interest in feminist philosophers; why she was able to empathize with foreign cultures; and why she was able to understand the Japanese mentality towards death.

キーワード

Ruth Benedict, anthropology, journals, feminist philosophers, normal/abnormal

1. はじめに

「ジャーナルの断片 1915 年～ 1934 年」は、ルース・ベネディクトの死後 10 年経過した 1958 年に、友人の一人であった文化人類学者マーガレット・ミードが、ベネディクトの日記、論文、書簡、詩作などを編集し、*Anthropologist at Work: Writings of Ruth Benedict* (Houghton Mifflin, Boston, 1959) として出版した本の一部である。

ジャーナルが綴られたノートは、ルースが海外に行く前に家人から贈られたものであった。

ルースはバツサー大学を卒業した1909年、一年間ヨーロッパに留学する機会を与えられた。海外で得た貴重な体験を書き残すようにと言われてもらったものであった。しかし、ルースはそのような目的でノートを使用しなくなかった。自分だけのためにこのノートを使いたいと思った。その時のことをルースは次のように記している。

……そしてそのノートはもらってから […] 3年経った。ドレスデンとローマは遠い昔のように思える。ページを開くまで、旅の宝石を後世に残すためにこのノートがあるのだということを忘れていた。全く違った目的のためにこのノートを使いたい。このノートを自分だけのものにしたい。これから先、このノートによって正しい方向に導かれたい。(Mead 1959: 119 筆者訳)

彼女がノートの最初のページを記したのは1912年10月であった。この後、1934年までジャーナルは綴られていくことになるが、日付はきちんと記入されている日もあるが、書かれていない日も多い。日記やジャーナルといった私的な記録は、後に読まれることを考えて書かれたものは少ない。そのため、自分さえ理解できれば良い。本稿の筆者はこのジャーナルを日本語に翻訳するという作業を行なったのだが、それには悪戦苦闘した。ジャーナルを書いていた時期のルースは文章を書くことに慣れていたとは思えず、抽象的な概念はもとより彼女の心の内のどうしようもない苦しみを吐露している箇所を訳す過程で私たちは絶望感と怒りに近い気持ちに苛まれた。しかし、ノートに書かれた真意を探るため、必死に読み解いていくことは、ルースの内面に迫っていくことのように思えた。そうすることで見えてくるものがあつた。その見えてきたことを本研究ノートに記したい。

それは、ベネディクトの文化人類学者としての研究の種のようなものがこのジャーナルに見られるということである。ジャーナルを書いている段階でその種のようなものはルースの心を乱した。それは自分が他の人とは違うという気づきだったり、女として生きることの葛藤であったり、人間としてどう生きるべきかという葛藤であったりした。1919年に文化人類学と出会うまで、これらの葛藤はルース個人の心の中の問題だったのである。それが後に社会の問題としてルースが論文で取り上げることになり、ルースは文化人類学者として開花するのである。ジャーナルを読むと、ルースが研究テーマとして取り上げた様々なテーマは、実は、子供の頃から自分の中にあつた葛藤を解決するものだったことが伺える。本研究によって、ルース・ベネディクトのこれまで取り上げられることが少なかった「ジャーナル」に光が当たれば幸いである。

2. ジャーナルに綴られたルースの思い

ジャーナルを書き始める1915年より数年前の1912年から1914年までの2年間、ルースはパサディナにある女学校で教えていた。他に仕事がなかったからという理由だけで始めた仕事だったが、これが生涯の仕事となってしまうかもしれないというある種の恐怖を感じていた。この時代、男性に開かれていた仕事と比べて女性が男性と伍して戦うことのできることは非常に少なかった。ルースは女性に開かれた可能性に限界があることに気づかされた。子どもの頃よりルースは苦しみや悲しみに耐えてきたが、孤独感、虚しさには我慢ならなかった。そして彼女はそうした困難の大部分は女性であることに起因すると考える。女であることで得られることはただ一つで、それは愛、安らかな家庭、そして子どもを持つことではないかと思うようになる。

1914年6月にルースはコーネル大学の化学者スタンレー・ベネディクトと結婚した。スタンレーはルースより3歳年上で、意志が強く、人生の目的をしっかりと持ち、学者としての人生を着実に歩んでいた。ルースとは重要な点で共通点もあった。彼は科学の世界だけでなく、文学や哲学の世界にも明るかった。女性として強く願っていた愛を手に入れ、ルースは幸福感で満たされた。結婚当初、彼女は結婚が「人生のすべてに意味を与えてくれた」とジャーナルに書いている。

しかし、最初の恋愛感情が穏やかになるにつれ、ルースはスタンレーとの生活は、自分が人生に求め続けていたものを満足させるものではないとわかってきた（Caffrey 1989: 81）。ルースは結婚してもなお残る淋しさ、満たされない思いを感じる。ジャーナルに日付はないが、内容から見て下の文は1915年に書かれたものと推測することができる。

……彼の職場に行くことはないし、親しい同僚も知らない。私は自分の世界を持たないと。自分のはけ口。自分の力を発揮する機会がないと。[...] やりたいことはすべて、この家で自分の好きな時間にできる。必要なことは、自分の目標を真剣に実現させることで、そのためにはある程度がむしゃらに書きものをしなければならない。（Mead 1959: 136 筆者訳）

また、1916年12月23日のジャーナルで、ルースは、毎年クリスマス頃に過ごす別荘での出来事について語っている。終わろうとしている1年間を振り返って、結局あまり物書きをしなかった自分に対する嫌悪感に苛まれている様子がわかる。

……最悪の気分が苛まれ……そんな時私がいつも思い出し、懸命にしがみつ়く唯一のルールは、頭が冷静になるまで何も決めないことである。（Mead 1959: 137 筆者訳）

ルースは模索の真只中にいた。

……私は早く「女性」の研究をやり遂げたい。以前はもっと読者を理解しなければメッセージが伝わらないと思っていた。メアリー・ウォルストンクラフト研究に欠けているのはそこだと思っていた。でも自分だけのために書くことにした。自分の欲求さえ満足させられればいいと思う…… (Mead 1959: 138 筆者訳)

ルースは自分の置かれているパラサイト的な立場にどうしても我慢ならなかった。自分が働いて稼いだお金でやっていけるようになりたいし、哀れな人生にはしたくないと思った。しかし、スタンレーの反応は冷静だった。あなたはどんな状況にも安住できないと指摘され、たとえ子どもがいたとしても、しばらくしたら、また不平や不満を口にするのがおちだと言われてしまう。スタンレーの厳しい言葉に対してルースは奮い立つ。これからの自分を見てほしい。今真剣に考えていることがあり、そのためならどんな努力も惜しまないと考える。ルースはそれを証明するために書くことにまい進する。しかし、ことはそんなにうまく運ぶはずはなく、失望感はいや増して強かった。誰にも理解してもらえないことで淋しさも絶望感も、悲しみも深くなる。彼女は仮面を被ることで自分の感情を抑え続けた。日々の鬱とした気持ちを包み隠さず彼女はジャーナルに綴っている。ルースにとって人生は何の意味も目的もないもののように思えた。誰もそういったことを理解してくれるとは思わなかったが、問題解決の手がかりになるかもしれないという思いから、様々なことを試みる模索の日々でもあった。

ルースは生涯子どもを持つことがなかった。カフリー (Caffrey 1989: 82) によると、それは身体的な理由によるものだったらしい。子供についてルースはジャーナルにこんな記述をしている。

……もし子どもがいたり、妊娠したりしていたなら、このように自分を鼓舞したりはしないだろう……子どもを通して自分の夢を実現しようと思うのは、人生の大きな誤算で、それによって悲惨なしっぺ返しをくらうことになる。生まれてきた子どもを両親の「創造物」として育てることほど不公平なことはない。子どもは一人の独立した人間であり、両親と正反対の人間かもしれない……母親として、妻として創造力を発揮でき、努力を注ぐことができる自分自身の世界を持つことが賢明である。(Mead 1959: 136 筆者訳)

ルースは望みを達成するための計画に真剣に向き合い、文章を書くことで社会に影響を与えたいと思っていた。一時期は詩作に没頭し、一人の女性として認められることを切望していた。1917年5月のジャーナルにルースは苦しい胸の内を吐き出している。

計画が横道にはずれた年だった！たくさん書く予定だったのに……全く手がつけられていない……私にとって書くことがどんなにきつくて、苦しいか……すべてをあきらめて何が悪い。（Mead 1959: 141-142 筆者訳）

3. 文化人類学との出会い

1919年春、ルースは新しい経験をした。ジャーナルにはこの件について直接的な言及はないが、ルースはソーシャル・リサーチのニュー・スクールのコースを履修し始めた。ニュー・スクールの講義は伝統にとらわれない高等教育の実験として、1919年春にニューヨークで開講された。非常に刺激的な場であったようで、マーガレット・ミードはその当時のニュー・スクールを「優れた人達によって教授される、かき立てるような意見」と表現したそうだと（Caffrey 1989: 95）。そこでルースは文化人類学に出会い、ゴールデンワイザーやパーソンズといった名立たる研究者の手ほどきを受けた。人類学という学問の可能性の大きさをルースは強く感じたに違いない。

ルースはニュー・スクールに入学する前にもすでに様々な事柄について書いていた。上の章で述べたように、1916年12月23日のジャーナルで女性の研究に取り組みたいと書いている。実際、出版することはなかったものの、彼女はメアリー・ウォルストンクラフトの伝記を1914年から1917年ごろに書いている。メアリー・ウォルストンクラフトという女性は18世紀の終わりに生きたイギリスの作家、社会思想家で、男女の同権、教育の機会均等などを提唱したフェミニズムの先駆者である。自分が置かれたどうしようもない状況から脱却するために、ルースは自分の手本になるような過去の女性を探し求め、その人たちの生き方の研究をしたのである。メアリー・ウォルストンクラフトの他にルースは、アメリカのジャーナリスト、評論家であり、女性権利、男女の教育・雇用の機会均等を求めて活動したマーガレット・フラー、南アフリカの作家であり、黒人の立場を支持し、婦人参政権同盟を設立したオリーヴ・シュライナーの名前もジャーナルに記している。

ニュー・スクールで文化人類学を学ぶことによって、それまで自分が置かれている状況から逃れるために一人で研究していたことを、フェミニズムという枠組みの中で学問的に堂々と問題提起することができ、社会に対して様々な見解を開陳し、論ずることが可能となったのである。

4. 異文化への理解

ヴィクトリア朝文化の色濃い1887年にニューヨークで生まれたルースは、幼児の時に患った病が原因で難聴であった。それも起因してか子どもの頃から自分を異質と感じ、家族のなかで

も気難しい子と見られていた。難聴のルースが見出した効果的なコミュニケーションの手段は、文章を書くことであった。書くことで自分の気持ちを表現し、内面の葛藤を和らげた。

ルースはまた幼い頃から自分を取り巻く日常生活から脱し、若くして亡くなった敬愛する父親のいるもう一つの世界にしばしば逃避した。それは現実の生活にある混乱や混沌とした世界を容易に打ち消してくれた。死は常にルースにとって身近にあるものだった。1926年8月のジャーナルで、ルースは死に対する思いについて書いている。

死に対する憧れは終生変わることはなかったが、自殺は死を得る安っぽい方法であり、死だけはそうではあってはならないと思っていた。死後には自然と一体となって溶け合い、跡形もなくなり、何事もなかったかのように後世の人々が営々と生活を続ける。(Mead 1959: 153-154 筆者訳)

死に対する考えや憧れは、ルースの心に秘められた誰にも言えない感情であった。

そんな風に自分は周りの人と違うと感じ、アメリカという国の中で自分は異邦人のようだと感じていたルースだったからこそ、彼女は自分の価値観だけで相手を判断したり、差別したりせず、客観的な目で違う文化の人たちを見ることができたのではないかと筆者は思う。そして彼女にとって文化人類学で人間の多様性を研究することは、自分を肯定する手段になったのではないかと思われる。

1934年に *Journal of General Psychology* に掲載されたルースの論文 *Anthropology and the Abnormal* で彼女は次のように書いている。

多様な社会秩序の研究にうってつけの実験材料を提供するのは、スタンダード化された世界の文明に影響されていない未開の人達である。(Mead 1959: 262 筆者訳)

女性研究で当時の社会的スタンダードの枠を突き破って進んだ女性に興味を持ったのと同様に、スタンダード化された文明に影響されていない未開の人達を研究することは、ルースにとっては自分の居場所探しに近いものだったのではないかと筆者は考える。同論文でルースは、個人的にはノーマルな行動がなぜ社会的にはアブノーマルと認められるのかを思索した。そして次のように説明する。ノーマルが意味することは、文化によって育てられた人間性の一部であり、アブノーマルが意味するのは、文化が扱わない潜在的行動の一部である、と。したがって多くの人々は期待される範囲に自分たちの行動を合わせているのであると述べている。これは社会における人間の行動を説明していると同時に、人と違うことに苦しみ、仮面を被ってきたルース自身の在り方を正当化する分析にも見えてならない。

5. 日本人の死生観に対する理解

上に述べたように文化人類学の研究は、ルースにとってある意味で自分探しの旅でもあったのではないかと思われる。それまでアメリカ社会の中で強い疎外感を抱いていたのが、文化人類学を学ぶことによってアメリカとは異なる様々な社会があることを知り、外からアメリカ社会を見ることができるようになったのではないだろうか。

当時のアメリカは白人優越主義が横行していて、それ以外の人々はしばしば「野蛮」とか「未熟」とか呼ばれていた。1946年にワシントンDCで行ったラジオ講演でルースはこんなことを言っている。

実際、私たちが人種差別に身を委ねると、「外からの人間」を私たちと同じように耳や目や手を持っている人として受け入れなくなります。私たちは外国人をある商品のようにグループ分けし、色や顔やジェスチャーといった外見的なものによって選り分けます。その人の人格によって判断しなくなります。人種差別をなくすのはとても簡単です。人種、宗教、出身国などによらず、その人をそのまま受け入れるということです。（Mead 1959: 358 筆者訳）

第二次世界大戦中、日本人もアメリカ人に「精神的に未熟」な国民だと言われた。これは戦後政策をめぐる「日本人の性格構造」を分析するために開かれた臨時会議で精神分析学者のI. ヘンドリック스가出した結論だった。1944年12月16日、17日の二日間にわたってニューヨークで開かれたこの会議には精神分析学者、文化人類学者、社会学者など40名を越す研究者が参加した。会議の内容は、調整役を担っていたM. ミードによって要約された。「極秘」と書かれた未出版の要約の一部にヘンドリックスの発言が記されている。

……あらゆる点において日本人は未成熟です。ころころ変化する態度、人に応じて異なる感情表現などはパーソナリティ形成が成熟していないことを表すものです。（Mead 1944: 5-6 筆者訳）

ヘンドリックスの言葉は会議全体の流れを代表するような言葉であった。もちろんルースもこの会議に参加していた。会議の方向性に危機感を覚えたルースは、国民性の研究とは何かということを冷静に、客観的に論じる。国民性の研究とは、アメリカの価値観を絶対的な尺度として相手国民を測ることではなく、違う国民の価値観をその国民の観点に立って理解しようとする研究だと論じる。そしてその価値観はアメリカの文化と全く異質なものではなく、アメリカ文化の中にもその価値観は潜在的に存在することを論じた。こうすることによって、彼

女の議論はアメリカ人にも受け入れ易くなったのである。これもまた、ルース自身がアメリカ人であるにも関わらず、アメリカの絶対的尺度から外れた人間だったからこそ持てた見解なのではないかと思う。

連合軍にとって最も慎重を必要とする問題の一つは日本兵が降伏せずに自殺することであった。アメリカ社会では「アブノーマル」とされる自殺をいとも簡単にやってのける日本人の精神構造はアメリカ人にとって理解し難いものだった。これについてルースは A Note on Japanese Suicide という報告書を国務省に提出している。その中で彼女は次のように書いている。

現在の戦争で日本軍は兵隊が捕虜になる、つまり生き恥をさらすよりむしろ自分自身の手による死を選ぶべきだという立場をとっている。(Benedict 1945, 福井訳 1997: 193)

前章で述べたように、ルースは死に対して特別な感情を持っていた。「死に対する憧れは終生変わることはなかった」と彼女はジャーナルに書いている。1928年に発表した Psychological Types in the Cultures of the Southwest という論文でルースは南西ネイティブ・アメリカンのズニ・プエブロ族が自殺という概念を理解できないことを書いている。実際には、彼らは儀式で身体を清め、最上の服を着て殺されるために敵を出迎えるのだが、彼らはこれを自殺とは考えないと書いている (Mead 1959: 260 筆者訳)。つまり、ルースは、1926年8月のジャーナルに書いた「死を得る安っぽい方法」である自殺と、ズニ・プエブロ族の自我を超えた儀式的な自殺の区別をフィールドワークで知ったのである。そんなルースだったからこそ、日本兵の死を理解できたのではないかとと思われる。1948年に日本で出版された『菊と刀』でルースは、日本人の行動の根幹を成す部分として「日本人の自己鍛錬」に注目している。『日本人の行動パターン』(Benedict 1945, 福井訳 1997)の解説文で「自己鍛錬」について山折哲雄氏は次のように書いている。

自己鍛錬は「修養」や「無我」などに象徴される「強烈な自己訓練癖」をいう。そのような生き方は究極的には、「死んだつもりになって生きろ」というところまでいく。それはどこか、無に向かったの障害物競走を連想させるだろう。(Benedict 1945, 福井訳 1997: 221)

それはまさにルースがズニ・プエブロ族に見た自我を超えたものだったのである。

世界大戦後、占領政策を立てるためにアメリカは、日本人の行動背景にある精神構造を理解しなければならなかったのだが、自分たちとは大きく異なる日本人に対してある種の恐怖感を持っていた。しかし、ルースは、日本人の道德規範や責務を果たす精神は決して西洋人にとって脅威とはならず、戦後、真に平和な世界になればその状況に応じた方針を立てることができると報告書に書く。日本人が重要視するのは他人の尊敬を得ることなのであることをル

ースは見抜いていた（Benedict 1945, 福井訳 1997：157-158）。これが国務省に提出された報告書『日本人の行動パターン』である。『菊と刀』は戦時中の報告書を一般のアメリカ人向けに書き直したものであった。

6. 終わりに

ルースにはある信念があった。それは国務省に提出された報告書にも書かれている。彼女が信じていたのは、文化の多様性は混乱を招くのではなく、世界を豊かにするものであるということだった。それは彼女が幼い頃から感じていた異質が実は異質ではなく、その異質を追求することが学問的に大きな意味を持つことだと知ったから言えたことなのではないだろうか。ルースが文化人類学で追求した課題は、ルース自身の心の葛藤を解決することから始まった。ジャーナルを訳して気がついたことはそれである。ジャーナルを通して彼女の人生の一端を知り、彼女の探求心の源泉を垣間見ることができたように思う。

参考文献

- Benedict, R. F. (1945). Japanese behavior patterns. *Report/Office of War Information, Area III, Overseas Branch, Foreign Morale Analysis Division*. (福井七子 (訳) (1997). 『日本人の行動パターン』. NHK ブックス).
- Benedict, R. F. (1946), *The Chrysanthemum and the Sword*, Boston: Houghton Mifflin. (長谷川松治 (訳) (1948). 『菊と刀』. 社会思想研究会出版部).
- Caffrey, M. M. (1989). *Ruth Benedict: Stranger in the Land*. Austin: University of Texas Press.
- Mead, M. (1944). Provisional analytical summary of Institute of Pacific Relations Conference on Japanese Character Structure, December 16-17, 1944. Unpublished manuscript.
- Mead, M. (1959). *An Anthropologist at Work: Writings of Ruth Benedict*, Boston: Houghton Mifflin.